

RIES Research Institute of Environment for Sustainability, Faculty of Engineering, Kyushu University

NEWSLETTER

No.
03
2010.6

九州大学大学院工学研究院 附属循環型社会システム工学研究センター ニュースレター



— 特集記事 — 新センター長からの挨拶

附属循環型社会システム工学研究センター長 原 一広

「21世紀は、環境の世紀」と言われて久しくなりますが、この言葉は現在でも色あせることなく、日常生活に溶け込んで広く受け入れられています。しかし、この耳当たりの良い言葉が現在も意味を持っているという事は、現在も環境に関する懸念の多くが未だ解決されていない事を示しています。現代に生きる私たちには、持続的に人類が生存出来る環境を将来の子孫へと引き継ぐ義務があり、その為の糸口を見出すより多くの努力が求められています。

九州大学大学院工学研究院では広範な分野に亘る環境問題の解決を目指し、異なる部門に所属する教員を構成員とする部門横断型の旧附属環境システム科学研究センターが組織されていましたが、2008年4月、更に多くの工学研究院各部門が参画する拡充改組が行われ、持続可能な循環型社会の構築に工学的な立場から寄与する事を目的とした附属循環型社会システム工学研究センター（附属循環センター）が誕生しました。

附属循環センターの設立より現在まで2年の月日が過ぎようとしておりますが、その間、島岡前センター長のリーダーシップにより、平成21年4月に設立された全学組織「東アジア環境研究機構」を始めとして学内外・国内外の研究機関と緊密に連携した研究活動が活発に行われて来ております。また、本年3月、循環センターへの所属形態についてより柔軟に工学研究院各部門からの参画を可能にする研究体制の拡充を行い、この事により新たに2人の新進気鋭のメンバーを迎える事ができま

した。今後とも循環センターでは、この様な組織改革を行いながら以前にもまして活発な研究活動を行いたいと考えております。

最後になりましたが、附属循環センターではこれから環境問題の解決を目指し循環型社会の構築を支援する研究活動に邁進する所存であります。皆様方におかれましては当センターの研究活動に対する一層のご支援を賜りたくお願いする次第です。よろしくお願い申し上げます。



附属循環センター（伊都キャンパス、CE40）



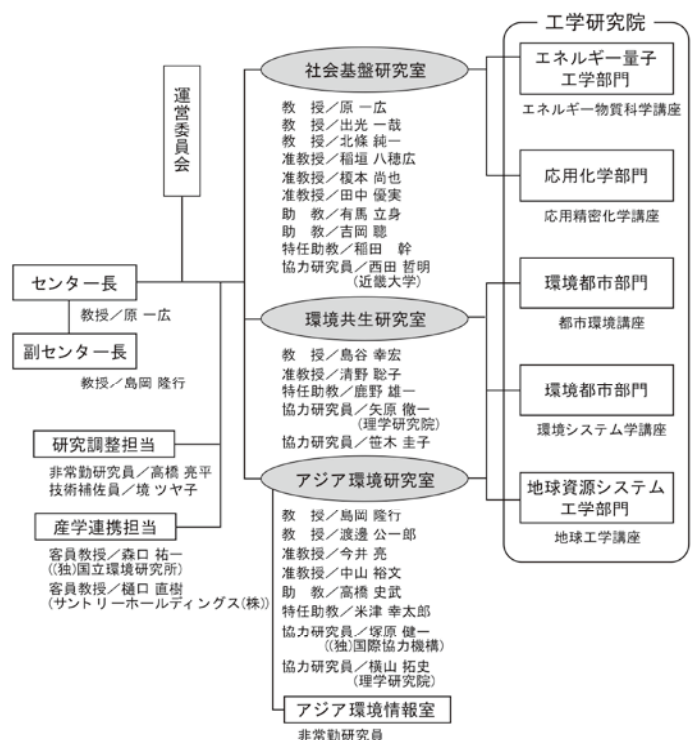
新しい研究組織の紹介

研究調整担当 高橋 亮平

九州大学大学院工学研究院・附属循環型社会システム工学研究センター（略称：附属循環センター）では、前組織から改組拡充後の設立3年目を迎えた現在、本格的な研究活動が進められています。工学研究院は、分野を横断する学際的、先駆的、萌芽的研究を押し進めることを中期計画に明記しており、この中で附属循環センターは、工学研究院の附属施設として学際的な研究を行うための場として活用されています。このような背景を含め、より一層の学際的研究活動の増進のため、本年度より新たに、清野聡子（准教授）と田中優実（准教授）の2名の教員が研究組織に加わりました。

附属循環センターの研究組織は、工学研究院の環境都市部門、エネルギー量子工学部門、地球資源システム工学部門、応用化学部門から計5講座6研究室を迎え入れた組織となっています。また、学内の他部局からも教員単位で当センターの研究活動への参画を要請する「協力研究員」の制度を設けている他、研究活動の円滑な遂行をサポートする組織として「アジア環境情報室」が配置されています。研究成果を地域社会へ還元するための体制として、客員教授2名の受け入れを含む「産学連携担当」も配置されており、「研究調整担当」の配置により、附属循環センター内の連携および部局を超えた学内環境研究の連携の活発化を図っています。

昨年度、新規に設立された全学組織の東アジア環境研究機構と附属循環センターの間には相互の強いサポート体制が敷かれており、その他、学内外の研究機関とも研究連携することにより、活動的な研究を進めて参ります。





河川・海岸の環境保全・再生を中心に、地域～九州～日本～アジア～世界と連続する自然共生型社会の在り方や、生態系も含めた水や物質循環の学際研究を目指します。

「生物多様性条約第10回締約国会議」が日本で本年開催され、海洋・沿岸生態系について国際的な議論が行われます。東アジア沿岸の海洋汚染や生態系の劣化は深刻な状況にあり、国内外の合意形成は難航しています。日本は海洋国として、破壊的漁業の禁止や海洋保護区の設定など国際的な枠組への参加が求められています。

海洋環境問題では、九州は要所です。現在進行形の国内問題に加え、東アジアの越境的環境問題の具体的な解決策を示す地域、フィールドなのです。

写真は長崎県奈留島ノコビ崎海岸の光景です。海流や季節風で国内外から運ばれてきた人工物の海岸漂着ゴミが、2m近く堆積しています。飲料ボトルから漁具まで、使い捨て、難分解の製品が溢れる社会となり、生活系・産業系の廃棄物が国境を超えて半永久的に海洋を漂流する事態が生じています。

問題解決には、各国の各地域が循環型社会に転じ、生態系保全が進んで自然資源も持続的に利用できる状況を形成していく必要があります。



長崎県奈留島ノコビ崎海岸に漂着した漂着ゴミ

センター活動報告とお知らせ

【研究会・講演会等】

◆2010年1月13日

客員教授講演会

講演題目:資源循環の国際化と国内リサイクル制度の課題
～容器包装リサイクルと家電リサイクルを中心に

講演者:森口祐一(国立環境研究所 循環型社会・廃棄物研究センター長、東京大学 大学院新領域創成科学研究科客員教授、附属循環センター客員教授)

場 所:附属循環センター・多目的セミナー室

内 容:現在、日本から東アジア圏(中国など)へ、“資源ゴミ”(ペットボトル、空き缶、古紙、電子製品基盤など)が輸出され、現地でリサイクル加工されています。現代における循環型社会の視点から、資源循環の国際化と国内リサイクル制度の共存に着目した課題について、ご講演を頂きました。

◆2010年5月27日

タイ・チュラロンコン大学の研究者による特別セミナー (Earth Resources Seminar)

講演題目:[Introduction to Rare-Earth Metal Resources in Thailand]

講演者:Punya Charusiri(Department of Geology, Faculty of Science, Chulalongkorn University, Thailand)

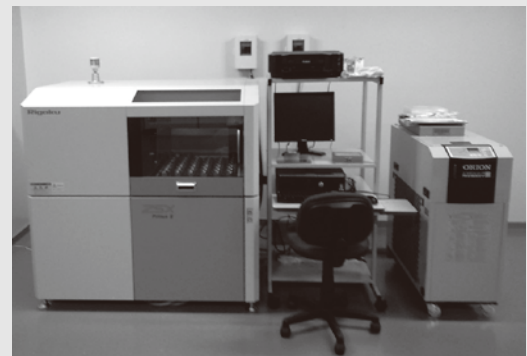
場 所:附属循環センター・多目的セミナー室

共 催:地球資源システム工学部門

内 容:現在、世界におけるレアメタル資源の枯渇が大きな問題となっています。タイ周辺国に分布する花崗岩風化殻に含まれる希土類元素の資源探査について、地球化学研究の観点から、ご講演を頂きました。

【お知らせ】

平成21年度補正予算「教育研究高度化のための支援体制整備事業」により、全学組織である東アジア環境研究機構が蛍光X線分析装置、岩石前処理装置等を調達し、これらの装置が工学研究院に導入されました。今後、蛍光X線分析装置は、附属循環センターによって管理運営されます。



新規に導入された波長分散型・蛍光X線分析装置

【編集後記】

設立3年目を迎えた附属循環センターでは、各研究分野が本格的な研究活動を展開しています。これから新センター長と新しい研究組織の下で、循環型社会の実現に向けた研究活動を精力的に進めて参りたいと思います。年2回の発行を目指しているニュースレター(News Letter No.3)も軌道に乗り始めました。今後も、皆様に「持続可能な循環型社会の構築」に関わる研究記事をお伝えして参りたいと思いますので、ご支援の程、宜しくお願い致します。

(研究調整担当 高橋 亮平、技術補佐員 境ツヤ子)

九州大学大学院工学研究院

附属循環型社会システム工学研究センター ニュースレター No.3

発行: 〒819-0395 福岡市西区元岡744

九州大学大学院工学研究院

附属循環型社会システム工学研究センター

発行人: 原 一広

編集: 高橋亮平・境ツヤ子

発行日: 2010年6月1日

TEL: 092-802-3560(センター事務室)

FAX: 092-802-3561

e-mail: office@ries.kyushu-u.ac.jp

http://www.ries.kyushu-u.ac.jp/

印刷: 城島印刷株式会社

TEL: 092-531-7102 FAX: 092-524-4411